

心はつとら

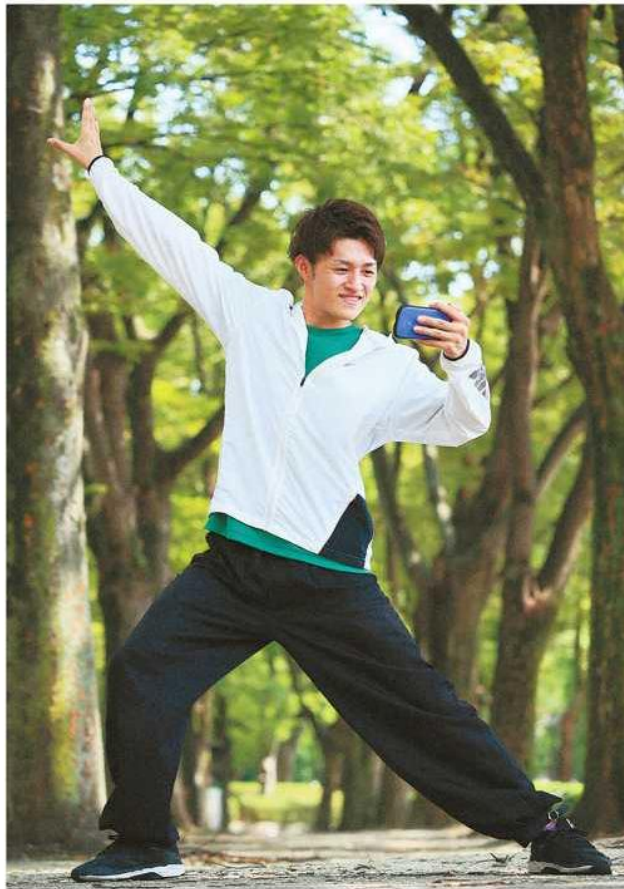
・下・

「毎年、大賞を目標にチーム全員で活動してきた。オンラインになっても、そこだけはぶれたくない」。今年で「にっぽんど真ん中祭り(どまつり)」への出場が十六回目となる愛知学院大の学生チーム「常笑」。代表の中西築さん(二〇)は闘志を燃やす。

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、三月下旬に大学側から活動休止を求められた。さらに六月初め、どまつりは各チームの踊りの映像を配信するオンライン形式で開かれることに。皆が集まって演舞を練習することができなくなった。「なま(の)出(で)ない(ない)」

コロナ禍の逆境

全員で乗り越え



振り付けの動画を見ながら練習する「常笑」の中西代表一名古屋市中央区

のままじゃダメだ」。休止で練習時間も量も足りない。そこで中西さんが呼び掛けて、離れていても練習

する互いの様子がわかり、情報を共有できるビデオ会議システム「Zoom(ズーム)」を導入。五月から週一、二回、メンバーそれぞれがパソコン画面の前で踊り、よりよい演舞にしようとする。逆境を乗り越え、作品では、一人一人がよさこい衣装を身にまとい躍動する映像に。全員で踊った過去の映像や写真も組み入れ、地元の日進市の名所も交えて五分以内にまとめた。名古屋市中区の大須商店街を愛する人が集まる「大須笑店街☆21」も、全員で集まる活動を自粛したチームの一つ。医療機関で働

ていたり、幼い子どもがいたり、感染予防に人一倍注意が必要なメンバーが多いからだ。それぞれが自宅で練習し、接触を減らすため、十三カ所に分かれてどまつり参加の映像を撮影した。

昨年大賞を獲得した「嘉門」(大阪市)は、オンライン開催を逆手に取り、例年の名古屋市中心部の会場ではできないことにこだわった。人通りの少ない早朝に道頓堀など大阪市内の名所で集まり、撮影。迫力のある踊りで、「大阪愛」を届ける。

代表の中山雄貴さん(二〇)は「踊る場所をいただけただけに感謝している。どまつりを一番盛り上げます」と誓った。(この連載は、梶山佑、大野沙羅、清水大輔が担当しました)